● ドストエフスキーの散歩道①●

ПРОГУЛЯЕМСЯ ПО ЛИТЕРАТУРЕ

今回から始まった新コーナー。ロシア文学を研究テーマとするミーシャ編集部員・桃井が、毎回、心に響く一文をロシア文学から紹介・解説します。今年はドストエフスキーの作品からシリーズでお届けします。

Мы широки, широки, как вся наша матушка России, мы все вместим и со всем уживемся!

「私たちは広大です、母なるロシアと同じように広大であり、すべてを受け入れ、すべてと仲よくやっていけるのであります。」

ドストエフスキー　『カラマーゾフの兄弟』　第１２編６

検事論告・性格描写より。１８８０年刊

◆フョードル・ミハイロビッチ・ドストエフスキー(1821-81)は、ロシアが誇る小説家・思想家で、「貧しい人たち」「罪と罰」「白痴」「悪霊」などの代表作があります。ペトラシェフスキー事件で死と直面し、有罪判決を受け、シベリア流刑の体験をもつドストエフスキーの作品には、人間の生々しい魂の叫び、罪の意識と葛藤、再生への希望が込められた言葉があふれています。◆『カラマーゾフの兄弟』は、地主フョードル・カラマーゾフとその息子たち―性格がまったく異なる３人兄弟・ドミートリー、イワン、アレクセイ（アリョーシャ）、そしてフョードルの使用人で、私生児でもあるスメルジャコフが物語の中心人物です。父フョードルが殺害され、その事件をめぐる裁判が展開していきます。ここでとりあげたセリフは主人公の１人、長男ドミートリーが、父親殺しの罪で裁判にかけられたとき、検事イッポリートが法廷で述べたものです。◆『カラマーゾフの兄弟』では、善と悪といった、相対する感情、思想の葛藤に苦しむ人間の姿が描かれています。他者との交流において、あるいは自らの中で「相反する心の闘いと和解」がドストエフスキーの文学において大きなテーマとなっているのです。善と悪という単純な図式だけで人間を裁くのではなく、すべてを受け入れる精神の広大さの礼賛は、ロシアの精神の骨格なのです。　　（桃井　富範）